

《 巻 頭 言 》

一九八〇年代

——『歴史と未来』第六号刊行にあたって——

中 嶋 嶺 雄

一九八〇年代はいかなる時代であろうか。私自身これまでは、中国の将来についても、国際社会の方向についても、密かに確信をもって大筋は見透し得たように思えるのだが、いま、一九八〇年代がどのような未来であるのか、それを展望することは、きわめて困難ではないかと感じている。それほどまでに未来を予測しがたい時代こそ一九八〇年代なのだともいえよう。暫く以前には、わが国でも「未来学」が流行したことがあった。だが、それは所詮、学問というにはあまりにも軽薄なものであったし、未来予測の方法論にもなり得なかった。やはり、未来を考えるには、たとえ予測の当りはずれは避けられないにせよ、歴史の教訓を真正面から現在にぶつけてみる以外にはないのではなからうか。

ところで、現代史をふりかえってみると、いずれも各年代末には、次の年代を規定する重大な出来事が起っていることに気づかざるを得ない。第二次世界大戦以前についても一九三九年、一九二九年、一九一九年と溯ってみれば、これらの年がいかに重要な歴史の転換点であったかは、すぐに了解できよう。しかし、ここでは戦前のことはさておいて、戦後史を考えてみよう。

まず四〇年代末、それは一九四九年のヨーロッパにおけるNATOの成立、アジアにおける中華人民共和国の出現に見られるように、戦後世界秩序を規定したヤルタ・ポツダム体制がいちはやく解体しはじめ、同時に資本主義世界体制と社会主義世界体制の対立が激化しはじめた時期であった。こうして中ソ友好同盟条約と朝鮮戦争に始まる一九五〇年代は、東西冷戦の時代となったが、このような国際環境はすでに四〇年代末に明白な輪郭を

形成していたのであった。

東西冷戦の時代として五〇年代も、しかし、年代末になると大きく変化していった。東側は、はやくも一九五八年の台湾海峡の危機前後の中ソの軍事防衛戦略上の抗争を通じて内部分裂を開始し、翌五九年の中印国境紛争ではそのことが外部にも見えはじめた。同時に、同年秋の米ソ首脳によるキャン・デーヴィッド会談に象徴されるように、米ソ両国は、バックス・ルツソー・アメリカーナ、といわれる共存体制へと移行しはじめていった。その頃、ドゴールのフランスは、こうした間隙を縫って台頭し、EECを形成してヨーロッパの復権をはかろうとした。このように五八、九年に起った出来事は、やがて一九六〇年代を国際政治の多極化時代へと導びいたのである。

次に六〇年代末には何が起こったか。六八年のジョンソン米大統領によるベトナム北爆停止声明は翌六九年のニクソン大統領によるグアム・ドクトリンとなってアジア情勢を大きく動かし、米中接近への道が開かれた。米中接近は、だが同時に六九年春と夏の中ソ国境軍事衝突に見られる中ソ対立の深刻化によって促進されたことは明白である。同年春の中国共産党九大大会によって文化大革命を一応收拾した中国は、こうして外部世界と対応する余裕をもちはじめたが、そのような中国を封じ込めるためにこそ、ソ連は同じ六九年にブレジネフ・ドクトリンに基づく「アジア集団安保」構想を提示し、中国はこれを「覇権主義」と見做して、中ソ冷戦が本格的に激化していった。

こうした経緯ののちに開幕した一九七〇年代は、当初、米中接近や西独の「東方外交」によって緊張緩和が印象づけられたものの、European State Systemを欠如した非欧米世界においてそれは畢竟、仮象でしかなく、大国間の緊張緩和は周辺諸国や中小諸国にかえって緊張を醸成したのであった。そもそも米中接近は、冷戦構造の本質的な解体であるどころか、中ソ対立とアメリカの力の相対的な低下の結果、冷戦サブ・システムが変化ないし転位したことではなく、逆に中ソ冷戦はより深刻化し、米中接近に制約されてソ連の世界戦略はさらに活発化し、大国の権力政治とパワー・ゲームのグローバルイゼーションがもたらされた。こうしたなかで七〇年代は石油問題に象徴される人類生存の危機を自覚させるとともに南北問題の重要性をクローズ・アップさせたが、こうした七〇年代をどう定義づけるべきかは、今後の宿題として残されている。

このような国際環境のなかで、一九七八、九年には、日中平和友好条約の締結、イランのホメイニ革命、ソ連条約の締結、米中国交樹立、中越戦争、中ソ友好同盟条約の廃棄、中ソ次官級会談の進行、朴・建國大元帥訪露など重要な国際的事件が相次いだ。これらの一連の出来事は、アジア・太平洋地域における米・日・中の一環「覇権」連合の形成への衝動とそれに対抗するソ連の軍事戦略の著しい拡大をもたらしつつ、新しい冷戦としての「生ぬるい戦争 (Cool War)」のグローバルな進展を背景にしているといえなくはない。こうした新しい国際環境がやはり一九八〇年代を規定してゆくのではなからうか。

このように見てくると、ほぼ十年間隔で現代史の転換が生じていることは、もはやたんなる偶然ではあり得ない。十年という時間は、新しい国際関係が形成され、やがてそこに問題が生じ、その調整の期間を経て、結局、そうした国際関係が変化しないしは破局を迎えるまでに要する「時間的成熟」の期間として必要十分なのであろう。

一九八〇年代は、かつて一九三〇年代を真摯で苛酷な体験のなかで生きぬいたジョージ・オーウェルが未来小説『一九八四年』で描いた不気味な予告——世界が米・中・ソに分割され、そうしたなかで左翼全体主義の非人間化が極限的に進行するという人類の未来の救いがたい危機の到来に際会する時代であるのかどうか。一方、ブレジネフ以後のソ連は一九八〇年代後半、石油の輸入国に転じ、軍拡のこれ以上の進展がソ連経済の成長とのバランスのうえからも不可能になるという予測がある。非毛沢東化をはかりつつ「四つの現代化」へと転換した中国の将来には、こうした転換への不可避性にもかかわらず、そこに多くの困難が予想される。そして、そうした困難のなかで八〇年代後半には中国の西側諸国との接触ももはや新鮮さを失い、一定限度の必要を充たし、やがて限界に達することになるかもしれない。そのような時期にも、中ソ両国は、相互の非生産的な敵意のゆえに膨大な軍事費を割きつづけ、国境を挟んで対峙し、双方がなおも国際舞台において対立しつつづけるであろうか。

中国内政の根本的な変化が実現した今日、中ソ関係は和解への歴史的衝動を潜在的に強めつつあるだけに、八〇年代は中ソ関係にとっても大きな転機となるかもしれない。いずれにせよ、わが「歴史と未来」は、一九八〇年代末に、どのような九〇年代を、そして二十一世紀を展望し得るものなのか……。

一九八〇年代の到来というこうした現実をよそに、わが国の政治家たちは、今日もまた一日、政権欲にかまけて醜態を演じていた。

(一九七九年十一月七日)